

甲骨占卜の問答形式

落 合 淳 思

序

甲骨文は、一般的には占いに關する記述であると理解されているが、一部の研究者はそれに反対する説を唱えている。「占い」という語はある程度の幅を持った概念であり、例えば『広辞苑』^①は「占象（うらかた）」によつて神意を問ひ、未来の吉凶を判断・予想すること」と説明するが、甲骨文が占いか否かという研究では、甲骨文の「貞」字以下が、将来に対する疑問を問ひかけ、それに対する答えを得ようとしたものか否かが論点になっている。本稿もこの点についての考察であり、「占い」「占卜」と言つた場合はこの条件を備えた記述であることの意味する。

ところで、甲骨文には繇辞（占いの判断を示した言葉）が記されることがあり、例えば「王 固^②て曰く『吉』と」（合集一七六八八など）のようなものである。このように、「固（＝占）」をし、かつ「吉」のような吉凶判断の語が記述されているのであるから、甲骨文は少なくとも形式的には占いであつたとするのが妥当である。^③

それにも関わらず甲骨文を占いでないとする説が提起されるのは、これまで、甲骨文の問答形式が明確にされなかつたために、甲骨文が占卜であることの確証が得られなかつたことが原因である。本稿は、甲骨文を占いでないとする諸説に答えることを通して、占卜の際の問答形式を明らかにし、甲骨文が占卜であることを証明する。なお、本稿の結論は甲骨文を占いと認めるので、書き下しを添える場合にはすべて問ひかけの形とする。

一 甲骨文非占卜説

甲骨文の前辞（文頭辞）の典型は「干支卜某貞」である。^④干支は日付、卜は甲骨に熱を加えて卜兆（ひび割れ）を生じさせる行動を指し、それに続く文字は占卜の担当者（真人）であり、貞字以外については異論がない。前辞末尾の「貞」については、『説文解字』が「貞、卜問なり」（三下）とすることから、早くから貞字以下の内容を占うことであるとされてきた。^⑤日本でも、一般に「とう」と訓じられている。しかし、少数の研究者は、「貞」を問ひかける意味とすると文意や文法に

矛盾が生じ、貞字以下は非疑問文として読むべきと主張している。

一九七二年にアメリカで発表された、D・N・キートリー (Keightley) 氏の "Shih Cheng (釈貞)" は、甲骨文を予言 (prediction) であり意思を表明したものとする。その根拠は貞字の解釈であり、先秦文献中の「貞」は「正」と通用することから、甲骨文の「貞」も、貞字以下の内容を正そうとしたことを意味するとし、『説文』を後起の説とした。キートリー氏以外にも、アメリカでは D・S・ニビソン (Nivison) 氏と P・M・セロイス (Seruys) 氏が甲骨文を占いではないとする説を発表し、ニビソン氏は貞を証明する (verify) こととし、セロイス氏は検査する (test) こととする⁽⁸⁾。

甲骨文の命辞 (貞字以下の部分であり甲骨文の主題) には、次の例のような望ましくない内容 (次掲①) や、望ましい内容とそうでないものを並列させるもの (「対貞」と呼ばれる。次掲②) も存在する。

① 壬戌卜 敵貞、今十月其有来媼。(壬戌卜して敵貞う、今十月、其れ来媼有るか。「来媼」は外寇) (合集七一三七)

② 戊申卜 貞、雀骨盤有疾。(戊申卜して貞う、雀は骨盤に疾有るか。

「雀」は人名)

戊申卜 貞、雀弗其骨盤有疾。(戊申卜して貞う、雀は其れ骨盤に疾有らざるか) (合集一三八六九)

こうしたものは、甲骨文を予言などとする各説では矛盾が生じるので、何らかの説明が必要とされる。キートリー氏は「貞」と「正」の対応を前提として肯定と否定の両者に可能性がある形式にすることで公平かつ正当になるという概念を想定し、セロイス氏は「其」に望ま

しくないことを表示する働きがあり望ましい内容と区別されていたとする。

これらの説とは別に、李学勤氏は一九八〇年に「关于自组卜辞的一些问题」⁽¹⁰⁾において、自組には命辞末尾に疑問文を表す助辞として「不」「乎」「執」「反」が存在すると指摘した。李氏は、「統論西周甲骨」⁽¹¹⁾では、西周甲骨において「其正」が文末に見えるものを非疑問文とするが、末尾に助辞がないものについては疑問文か否かを明言していない。これに対し、裘錫圭氏は「关于殷墟卜辞的命辞是否问句的考察」⁽¹²⁾において、「不」は驗辞 (占卜の内容が実際に起こったかどうかを記したもの) の省略形、「乎」は他動詞であり、「執」「反」(裘氏は「抑」に釈する) のみが疑問助辞であるとした上で、それが付されないものを全て非疑問文とした。裘氏が根拠としたのは、対貞の一部と「其」字の二点である。

③ 今者、王從望乘伐下危、受有祐。

今者、王勿從望乘伐下危、弗其受有祐。(合集六四八二。書き下しは後掲)

この対貞の後者について、もし王が望乘 (人名) を従えて下危 (地名) を伐たないのであれば、祐を受けるかどうかを問うこと自体が無意味であるとし、疑問文としては読み得ないとする。また裘氏は、『左伝』などの先秦文献中では「其」は意思表示として用いられていることから、甲骨文に多用されている其字も同様であり、問いかけの文言ではないとする。

以上の各説は、句末に疑問助辞が付されている場合があることを認

め、さらにニビソン氏や裘氏は対貞や選択形式のものの一部を占トとするが、高嶋謙一氏は「殷代貞卜言語の本質」⁽¹³⁾において甲骨文はすべて非疑問文であるとした。高嶋氏は、多様な形式が存在する甲骨文を、すべて非疑問文であると説明するために、キートリー説や祈禱・修祓説⁽¹⁴⁾など、六つの概念が併用されたとする。高嶋氏が甲骨文を非疑問文とした根拠には、次の四点がある。一、対貞について、もし両者とも疑問文とすると、ともにYesまたはNoの回答があった場合にコンフリクト(矛盾)が発生し、純疑問文(英語のwhatやwhenのような文)とすると卜兆のような単純な図形からは具体的な答えが得られない。二、甲骨文に見える「茲用」という験辞について、「茲」は命辞を指すが、疑問文を用いることはできないから命辞は非疑問文である。三、甲骨文の文末に用いられることがある「正」について、発音上の類似から「貞」と対応関係が認められ、キートリー説が支持される。四、裘氏が疑問助辞として認めた「執」「印」についても動詞または名詞であり、疑問助辞は全く存在しない。

以上のような、甲骨文を占いでないとする諸説には説明が不足している点がある。ニビソン氏や裘錫圭氏などは、甲骨文に占トと非占トの両者の混在を認めるが、「貞」という同一の動詞が両者を導くことが説明されていない。高嶋説は、すべて問いかけではないとするため貞字の矛盾は解消するものの、そのためには六つもの概念が「卜」という一つの行為の中で併用されていたと仮定しなければならない。

このように、甲骨文を占いでないとする説は整合性が保たれていないが、これまでは明確な反論がされてこなかった。王宇信氏⁽¹⁵⁾は、「左

伝」中では一貫して占トが「卜以決疑(卜し、以て疑を決する)」(桓公十一年)のために用いられていることや、雲南省の少数民族に現在も残る獣骨占トでは、将来の疑問について行われていることから、殷代の甲骨文も占トであったとするが、殷墟甲骨文について具体的に述べたのは、甲骨文中の「V(動詞)―不V(またはV―不)」を疑問形とすることへの批判と、裘錫圭氏の主張する二重の否定詞に関して述べるのみで、他には言及していない(詳しくは後述)。また、浅原達郎氏は「殷代の甲骨による占いと卜辞」⁽¹⁷⁾において、甲骨占トの回答は「吉」か「凶」によつて与えられたという「常識的」(八六頁)な説を提示するが、浅原氏は問いかけの形式だけを分析しており、回答形式の分析が欠如している。

二 甲骨占トの問答形式

甲骨文を占いでないとする先行研究には様々な主張があるが、高嶋氏が指摘した対貞におけるコンフリクトの可能性について答えることにより、甲骨占トの問答形式を明らかにすることができる。

高嶋氏の推論をまとめると、「甲骨占トをYesまたはNoで答えが得られる形式の疑問文と仮定すると、対貞の場合に両方ともにYesまたはNoとなる矛盾が発生する可能性がある。純疑問文と仮定すると、卜兆のようなものからは具体的な答えが得られない。ゆえに甲骨文は疑問文ではなく、占いでない」というものである。

この推論は、疑問文が、YesかNoまたは純疑問文でしか答えが得られない形式のどちらかであることが前提であり、英語のような文法

を想定している。しかし、甲骨文を含めて漢文の文法は英語に近いところがあるものの全く同じではないので、検証が必要である。

甲骨文の吉凶判断方法は現在のところ明らかになっていないが、第三期の甲骨文には、繇辞の「吉」「弘吉」「大吉」と、驗辞の「茲用」「用」^④が記されることがあり、ここから、卜兆から得られる回答の形態については知ることができる。

なお、「茲用（用はその省略形）」という驗辞には問題がある。「茲」には発語の文字・代名詞・連体修飾語の用法があるが、「茲用」においては「茲」は命辞を指す代名詞である。高嶋氏は「茲用」について、疑問文を用いることは不可能であるから、命辞は疑問文ではないと主張した。しかし、命辞は問いかかけの段階では未定事項であるが、驗辞を記す段階ではそれが起こったのか否かがすでに判明している既定事項なのであり、それに関する叙述が可能である。また、高嶋氏は「茲を用いる」ことができないとしたが、驗辞はすべて「茲用」の語順であり、「用茲」にはなっていない^⑤。甲骨文は主語↓動詞↓目的語の語順であるから、「茲」は「用」の目的語ではなく主語なのであり、「茲が用いられた」のである。「茲用」の後には更に具体的な驗辞が記されることがあるが、それは命辞の内容と一致しているので、「茲用」は命辞（＝茲）がその通り行われた（または起こった）ことの意味であることが知られる。

さて、第三期の甲骨占卜の中でも、類似の項目の中から一つを選択する形式のものが最も具体的に回答の形態を知ることができ、次のようなものがある。

④ 曹今夕酒。大吉。茲用。（曹れ今夕に酒せんか。大吉。茲れ用いらる。「酒」は祭祀名）

于翌日甲酒。（翌日甲に于いて酒せんか。「甲」は日付の十干）

其至日戊酒。（其れ至日戊に酒せんか。「戊」は日付の十干）（合集二七四五四。卷末図）

⑤ 牢、王受祐。吉（牢もちいるに、王は祐を受くるか。吉。「牢」は牲獸）

二牢、王受祐。大吉。茲用。（二牢もちいるに、王は祐を受くるか。大吉。茲れ用いらる）（合集二九六〇三）

④は、祭祀の日時を選択した占卜であり、第一辞にのみ「大吉」が記され、他辞には繇辞がない。そして、第一辞に「茲用」が付され、採用されたことを記している。⑤は、二辞とも繇辞が記されているが、第一辞が「吉」であるのに対し、第二辞は「大吉」であり、より強い吉兆の発現した第二辞の方が採用（「茲用」）されている。

このように、甲骨占卜の回答は、YesかNoかという正反するものではなく、吉かそうでないかという形で得られるのであり、言い換えれば、プラスかマイナスかではなく、プラスかゼロかという回答形態なのである。さらに④⑤の例からは、甲骨占卜における卜兆の発現には段階があり、最も高いランクが「大吉（弘吉と表記される場合もある）」と表示され、その次のランクが「吉」と表示され、最下級は吉すら記されないという表現であることが知られる。つまり、「吉」は、繇辞において「王固曰、吉」のように言う場合には「幸運」の意味であるが、単独で記される場合には、「卜兆の発現の強さ」という意味で

あり、繇辞よりは兆辞に近い性質だったのである（兆辞とは卜兆の発現の様子を記したもので「二告」「小告」「不悟龜」などがある）⁽²⁰⁾。

さらに、次のような例から、三段階のランクの内部についても、さらに細かい判断が可能であったことが知られる。

⑥ 曹奥田、無災。吉。（曹れ奥に田するに、災い無きか。吉。「田」は狩獵の意）

曹盛田、無災。（曹れ盛に田するに、災い無きか）

曹芥田、無災。吉。用。（曹れ芥に田するに、災い無きか。吉。用いらる）

曹率田、無災。吉。（曹れ率に田するに、災い無きか。吉）

曹率田、無災。吉。（曹れ率に田するに、災い無きか。吉）（屯南二

三八六。卷末図）

⑥は田獵地を選択したものである。この例では、第二辞を除いた全てが「吉」のランクの卜兆であるにも関わらず、第三辞に決定されている。つまり、第三辞は第一・四辞と同じく「吉」のランクではあるものの、それよりもやや度合いが強い卜兆が発現したのである。このように、甲骨占卜の判断では、「大吉（または弘吉）」、「吉」、マーク無しという三段階のランク付けの内部でも序列化が可能な形態で回答が得られたのである。

正反する内容を述べる対貞であっても、第三期には選択形式と同様の回答および判断が記されており、次のようなものがある。

⑦ 乙、不雨。吉。茲用。（乙、雨ふらざるか。吉。茲れ用いらる）

其雨。（其れ雨ふるか）（合集二九八七三）⁽²¹⁾

⑧ 壬、大啓。大吉。用（壬、大啓なるか。大吉。用いらる。「啓」は

晴天の意）

壬、不啓。吉。（壬、啓ならざるか。吉）（合集三〇二二三の右列）⁽²²⁾

⑦は前者のみに「吉」が記され、これが採用されている。⑧は両者に繇辞があるが、選択形式と同様に、吉の度合いが強い「大吉」の前者が採用されている⁽²³⁾。前述のように、甲骨占卜はYesかNoかではなく、より強い卜兆の現れた命辞を採用する形式の占卜であるから、対貞であっても高嶋氏の想定したコンフリクトは起こらないのである。なお、対貞は第三期だけでなく他期にも見られ、第一期に最も多いが、第一期には別個には繇辞が記されず、統一して一つだけの繇辞が記され、次のようになっていく。

⑨ 癸未卜 般貞、翌甲申、王壺上甲日。王固曰、吉壺。允壺。（癸未卜

して般貞う、翌甲申、王上甲日に壺せんか。王固て曰く、「吉なり、

壺せん」と。允に壺せり。「壺」は祭祀名）

癸未卜 般貞、翌甲申、王勿壺上甲日。（癸未卜して般貞う、翌甲申、

王上甲日に壺するなからんか）（合集一二四八）

⑩ 庚辰卜 古貞、翌辛巳、易日。王固曰、易日。（庚辰卜して古貞う、

翌辛巳、易日ならんか。王固て曰く、「易日ならん」と。「易日」

は曇天の意）

貞、翌辛巳、不其易日。（貞う、翌辛巳、其れ易日ならざるか）

（合集一三二二〇）

しかし、第一期の対貞も一回の占卜で判断されたのではない。次の例のように、それぞれに兆辞が付記される場合があり、第一期も第三期と同様に個別に占卜が行われ、吉（卜兆の強さ）の度合いによって

判断されたものが、最終的に一つの繇辞にまとめられたことが確かめられる。

⑩甲午卜延貞、東土受年。二告。(甲午卜して延貞う、東土は年みのりを受くるか。二告)

甲午卜延貞、東土不其受年。二告。(甲午卜して延貞う、東土は其れ年を受けざるか。二告)(合集九七三五)

以上のように、甲骨文における選択形式や対貞の問答は、将来の可能性を提示して問いかけ、細密な序列化が可能な回答が得られる形態であった。回答が変則的ではあるが、将来の疑問を問いかけた文言である以上、甲骨文は「疑問文」と呼ぶべきであろう。

三 貞字について

キートリー説は、『易』『国語』『周礼』などの先秦文献では「正」の意味で貞字が使われ、各注釈も「貞、正也」と述べることから、甲骨文の「貞」も正の意であり、貞字以下の内容を「正す(現実化する)」ものと解釈する。また、高嶋説では上古音の貞と正は発音が類似することから、甲骨文の段階でも意味上の対応関係があったとする。そのため、両説ともに、『説文解字』の「貞、卜問也」は後起の説であると解釈する。

しかし、「先秦文献」といっても成立は東周代であるから、殷墟甲骨文とは少なくとも数百年の開きがあり、字義が転化するには十分な時代差である。一方『説文』は、甲骨・金文学の成果により一定量の齟齬そごが判明しているので無条件には信頼できないものの、語源を明らか

にしようとした字典であり、先秦文献中の用法よりも古い情報が残っていることが多い。

字義が転化した例として、「覇」を例に挙げる。覇字は、西周金文では月齢を表示する文字として用いられ、月が満ちゆく期間が「既生覇」、月が欠けゆく期間が「既死覇」である。しかし、西周代末期から春秋時代初期にかけて月齢表示が使用されなくなり、その結果、「伯(諸侯の長の意)」字の仮借としての用法だけが残り、先秦文献に見える覇字は、ほとんどが「覇者(または霸王)」の意味で用いられている。²⁶⁾一方、『説文』は「覇、月始めて生まれ、覇然とするなり」(七上)と言い、語源が月齢に関係することを述べている。

このように、先秦文献の用法は甲骨文から変化している場合がある。同様に、「貞」についても、甲骨文の段階での字義は、西周以降、占卜文辞の変化や、甲骨刻辞が行われなくなったことよって情報が失われ、発音の類似による「正」の仮借としての用法が残ったと考えてよいだろう。要するに、「貞」と「正」は、意味が近いことが原因で発音が近くなったのではなく、発音が近いことが原因で先秦文献中では通用するようになったのである。

キートリー氏や高嶋氏の説は、文献の性質を無視して時代だけを比較したものであり、初歩的なミスと言わざるを得ない。

なお、『説文』は字義だけでなく字形についても古い情報を残している。「貞」は甲骨文の段階では「鼎」の省略形であるが、篆書以降では字形が「卜」と「貝」から成るものに変化した。これに対し『説文』は、「卜・貝に从う」としながらも、「一に鼎の省声と曰う」と述べて

いる。このことも、『説文』の「貞」字に関する情報の信頼性を裏付けている。

四 文末語について

李学勤氏は疑問文を表示する文末助辞として「不」「乎」「執」「反」を認め、裘錫圭氏は「執」「反」（裘氏は「抑」に釈する）のみが疑問助辞であるとし、高嶋氏はすべて疑問助辞ではないとした。

「不」については王宇信氏も述べるように験辞であり、次のような例から、「允不」と同意であることが明らかである。

⑫ 戊寅卜、于癸舞雨。不。（戊寅卜す、癸に于いて舞するに雨ふるか。不たり。「舞」は祭儀）

乙未卜、翌日丁不其雨。允不。（乙未卜、翌日に其れ雨ふらざるか。允に不たり。甲骨文では「翌日」は一句以内であれば用いられる）（合集二〇三九八）

「乎」は甲骨文では「呼」の意であり、文末に用いられる場合も「勿惟多臣乎（呼）」（惟れ多臣を呼ぶ勿からんか。合集六二〇）のように、その前の語が人名（祖先名の場合もある）や集団名であることから、「呼某」の倒置形であることが知られる。¹⁷⁾

次に、李氏が「反」、裘氏が「抑」に釈した文字について見る。この文字は、座した人を手で捕らえる会意字である。字形には手が座人の後ろにあるものと前にあるものの二種類があり、李・裘両氏は区別していないが、甲骨文中では用法に区別がある。前者は「反」、後者は「印」と釈されることが多く、本稿もこれに従う。

「反」は例外なく捕虜の意であり、次の例のように、命辞の末尾にある場合でも人牲として解釈するのが妥当である。

⑬ 癸未卜口、余于祖庚羊豕反。（癸未卜して口、余は祖庚に于いて羊・豕・反もちいんか。「口」は真人。「余」は一人称。「貞」は省略されている）（合集二二〇四七）

一方、「印」については、原義は捕獲する意の動詞であるが、それだけでは解し得ない例がある。

⑭ 丙辰卜、丁巳、其兪印。允兪。（合集一九七八〇。卷末凶。書き下しは後掲）

一般に、「兪」は「陰」と釈され、日が陰る意とされるが、高嶋氏は、この例について、「兪」を印（高嶋氏は捕虜と見なす）を捕獲する意とする。しかし、次の例では、験辞にも天候が記されていることから、「兪」が天候に関する文字であることが明らかである。

⑮ 戊戌卜貞、其兪印。翌日己、啓、不見雲。（合集二〇九八八。卷末凶。書き下しは後掲）

このように、「印」には捕獲とは関連しない用法があるので、高嶋氏の字釈は誤りである。一方、これを疑問を表す助辞と仮定すれば、当然、裘氏のように疑問助辞が付されないものは疑問文ではないという推測に至ってしまう。

実は、甲骨文には、次の例のような本来の字義から離れて吉凶を示す用法が見られ、「印」もその一種であると考えられる。¹⁸⁾

「齒」は、原義は文字通り歯牙であり、「貞、疾齒、惟父乙崇（貞う、齒を疾むは、惟れ父乙崇るか）」（合集一三六四九）などがあるが、次

の例では凶を意味する用法である。

⑭ 丁丑卜賓貞、束得。王固曰、其得惟庚、其惟丙其齒。四日庚辰、束允得。十二月。(丁丑卜して賓貞う、束は得るか。王固て曰く、「其れ得るは惟れ庚ならん、其れ惟れ丙なれば其れ齒ならん」と。

四日庚辰、束は允に得たり。十二月)(合集八八八四。卷末図)

「鬼」は原義は鬼神であり「庚辰卜貞、多鬼夢、不至凶(庚辰卜して貞う、多鬼を夢みるに、凶に至らざるか)」(合集一七四五一)などの例があるが、次の例では吉凶を表示する繇辞として用いられている。

⑮ 辛酉卜貞、自今五日雨。(辛酉卜して貞う、今より五日、雨ふるか)

王固曰、惟甲茲鬼、惟介。四日甲子、允雨雷(王固て曰く、惟れ甲に茲れ鬼ならん、惟れ介ならん。四日甲子、允に雨雷あり。

「鬼」「介」の訓は不明であるが、この場合では占卜した日程、すなわち五日目の乙丑よりも一日前の甲子に降雨があり、それを指すのであろう)(合集一〇八六。繇辞は反面に記載)

「囊」は囊形であり、祭祀名として見え、「丁未卜、王其商囊、不其受年(丁未卜す、王は其れ商に囊するに、其れ年を受けざるか)」(合集二〇六五四。「商」は殷都)などがあるが、次のように、祭祀とは関係ない命辞の末尾にも吉凶を意味する文字として用いられる。

⑯ 己亥卜賓貞、翌庚子、步戈人、不囊。十二月。(己亥卜して賓貞う、翌庚子、戈人に歩(ゆ)くに、囊ならざるか。十二月。「戈人」は族名。吉凶語としての囊については験辞を記す例がないため意味するところは不明)(英国五六四。卷末図)

これらの例に照らせば、句末に用いられる「印」についても、吉凶を表示する語と見なすことが可能である。前掲の⑭⑮は、⑭が「丙辰卜す、丁巳、其れ陰なること印ならんか。允に陰たり」、⑮が「戊戌卜す、其れ陰なること印ならんか。翌己、啓たり、雲を見ず」と訓読することで整合性を持つ。⑯の験辞の「允に陰たり」から、「印」は命辞の通りになる意であると推定できる。

李・裘両氏が疑問助辞とした「執」は、字形は手枷、または手枷に両手あるいは人が捕らえられている形であり、原義は捕獲する意の動詞である。しかし、次の例は命辞に欠損があるが、残存部分から降雨に関する占卜と推定でき、田獵や戦争のように捕獲を行う内容ではないことから、やはり字義の転化した吉凶語としての用法と考えられる。

⑰ ……卜勺、不其……雨鬲印。延雨執。(……卜して勺、其れ……雨鬲せざること印ならんか。延べて雨ふること執ならんか。「鬲」は字義不明。「延」は引き続いての意。「貞」は省略されている)(合集一九七七八)

高嶋氏が「貞」と対応関係にあるとした文末の「正(原義は征伐)」についても、高嶋氏は「貞」を「正す」と訓じるという前提の下で前辞の「貞」と文末の「正」との対応関係を想定したが、前節までに述べたようにその前提は成り立たないので、次のような例は吉凶語として読むべきである。

⑱ 壬子卜賓、侑于示壬正。(壬子卜して賓、示壬に侑すること正ならんか。「貞」は省略されている)(合集一一四〇)

以上のように、甲骨文の文末においては、字義の転化した吉凶語を

検出することができたが、疑問を表す助辞は全く存在しなかった。しかし、甲骨文の段階では、文末助辞そのものが未成立であり存在しないので、疑問助辞の不在をもって甲骨文を非疑問文とすることはできない。「貞」字はそれ以下を問うという意味だったのであるから、疑問助辞が付されなくても命辞は疑問文として読むべきである。

五 二重の否定文について

裘錫圭氏は③(再掲)の後者のような否定詞が二つ含まれる命辞について、もし攻撃を行わないならば、それに関する祐の有無を問うことは矛盾するとした。

③今者、王從望乘伐下危、受有祐。

今者、王勿從望乘伐下危、弗其受有祐。

裘説は、命辞の前半部分を後半部分の条件節とすることを前提としている。しかし、殷代においては、少なくとも形式的には甲骨占卜に判断を委ねていたのであるから、当然、祐が受けられない場合には軍事行動を起こさないことになる。つまり、問いかけの語順としては、「一、軍事行動、二、それに対する祐の有無」となるが、実際の行動としては、「一、祐が受けられるという占卜判断、二、軍事行動を起こす」または「一、祐が受けられないという占卜判断、二、軍事行動を起こさない」のどちらかになるのである。対貞とは、正反対の内容を提示して判断を行う形態の占卜であるから、殷人にとっては、「祐が受けられ、戦争をする」の反対は、「戦争をして、祐が受けられない」ではなく「祐が受けられないので、戦争をしない」でなければならぬ

い。

要するに、前半が後半の条件節になるのではなく、両者は並列し、かつ肯定否定が一致する関係なのである。従って、③については、複文ではなく重文での解釈が妥当であり、書き下せば、「今、王、望乘を從え下危を伐たんか、有祐を受くるか」「今、王、望乘を從え下危を伐つ勿らんか、其れ有祐を受けざるか」となる。

なお、王宇信氏は、命辞後半の「祐」を征伐ではなく王に対するものと見なす陳煒湛氏の説を支持し、前掲の③について、「もし王が下危を伐つならば、王は祐を維持できるか」「もし王が下危を伐たないならば、王は祐を維持できないか」と読み、両者を同じ意味とする。しかし、対貞は一般に二辞が正反対の意味になっているので、これだけを同意とする王説は整合性が得られない。

六 「其」について

ニピソン氏は「其」に望ましくないことを表示する意志が含まれているとし、一方、裘錫圭氏は実行の意志があるとしており、正反対の説を唱えている。

先秦文献中の「其」については、裘氏が延べるように、それを希求する意志が込められていることが多いが、甲骨文にはその傾向は一切見られない。ニピソン氏の主張については、第一期賓組以外にはその傾向は強くなく、賓組についても、前掲の③や⑪はその通りであるが、②のような例外もある。

しかし、これらの説の誤解の重要な点は比率の問題ではなく、望ま

しいか否かが区別されていることと、望ましくない内容が可能性として除外されることを混同したことにある。

甲骨文の対貞では、結果として望ましい内容が採用されていることが多いので、何らかの工作が行われていたことは確かであろうが、⑩（再掲）では、対貞のうち望ましくない内容についても兆辞が記されていることから、少なくとも形式的には占卜が行われていたことが明らかである。

⑪甲午卜延貞、東土受年。二告。

甲午卜延貞、東土不其受年。二告。

従って、望ましくない内容であっても、形式的には可能性が除外されていないのであり、「其」字を非疑問文の根拠とするニビソン説・裘説は誤りである。

結 び

本稿は、甲骨文を占卜ではないとする諸説を受けて、甲骨文の問答形式などを分析した。その結果、甲骨文とは、将来の可能性の提示に対し、段階を持った回答が与えられる変則的な問答形式の占卜であることが明らかになった。また、貞字について『説文』の解釈が妥当であることや、従来は疑問助辞とされていた文末語は字義の転化した吉凶語であることなども論じた。

甲骨文が、少なくとも形式的には占卜であることが確かめられたのであるが、このことから、さらに次の二点の問題を提起したい。

ひとつは占卜における殷王の利害関係である。例えば⑫は、五日目

の乙丑に雨が降るかを問い、王が四日目の甲子であると占い、実際に甲子に雨が降ったという記述であるが、現代ですら雨が降るのが何日後かを予測するのが難しいのであるから、これが結果を知った上での繇辞の改竄であることは疑いの余地がない。しかし、占いを正解に見せかけることで、具体的に殷王にどのような政治上の利点があったのかは具体的に明らかにされていない。

もうひとつは時代差である。甲骨文の初期には、「齒を疾むか」「婉するに、嘉ならんか」⁽³⁴⁾のような人為的には決められない事柄が多く占卜の対象になっているが、中後期には、田獵や祭祀のような人が能動的に行う事柄が主に占卜されている。時代ごとに統計をとることにより占卜に求められた役割の変化も読みとることができるだろう。

これらは、甲骨占卜だけではなく、殷代政治史にも相互に関わりを持つものであり、研究が進められるべき問題である。

なお、本稿が論じた甲骨文の問答形式は、対貞と選択形式のみであったから、今後、単独の占卜についても明らかにしていきたい。

註

- (1) 岩波書店、第五版（一九九八年）。
- (2) 郭沫若主編『甲骨文合集』中華書局、一九八三年。
- (3) 甲骨文的繇辞には「不吉」に比較して「吉」が圧倒的に多い。すでに白川静「卜辞の本質」(『立命館文学』六二、一九四八年)が、甲骨文は形式的には占卜であるが、実質は儀礼的行為であったとしている。
- (4) 一部が省略される場合もある。
- (5) 「貞」は「以下の内容を占う」意であるため、命辞の文頭と見なすこともできる。

- (6) 羅振玉『殷墟書契考釈』（『羅雪堂先生全集』三編所収、文華出版公司、一九七〇年）など。
- (7) 一九七二年に学会発表された論文であるが、本文が手に入らなかったので高嶋氏論文、および雷煥章『法国所蔵甲骨録』（光啓出版社、一九八五年）の要約を参照した。この論文は入手が困難であり、後掲の裘錫圭氏と王宇信氏も、『法国』の要約のみを参照している。
- (8) 『The 'Question' Question』（学会発表論文）。『法国所蔵甲骨』、裘氏論文、高嶋氏論文の要約に拠る。
- (9) "Studies in the Language of the Shang Oracle Inscriptions" T'oung Pao (通報), Vol. LX, 1974.
- (10) 『古文字研究』三、一九八〇年。
- (11) 『人文雑誌』一九八六年第一期。
- (12) 『中国語文』一九八八年第一期。
- (13) 『東洋文化研究所紀要』一一〇、一九八九年。
- (14) 白川静「卜辞の本質」が、甲骨文は形式的には占卜であるが実質的には祈禱・修祓であるとするのを高嶋氏が拡大解釈し、形式的にも祈禱・修祓であるとした説。
- (15) 『申論殷墟卜辞の命辞為問句』『中原文物』一九八九年二期、『甲骨学一百年』（一九九九年、社会科学文献出版社）二七七～二八〇頁。
- (16) 『左伝』中の「卜」は甲骨文の用法と異なり、吉凶判断まで含まれる。
- (17) 東アジア性異学会編『亀卜』第二章、臨川書店、二〇〇六年。
- (18) 採用されなかったものには「不用」の験辞が付されることがある。
- (19) 甲骨文中で「用茲」の語順になるのは、「茲」が目的語ではなく連体修飾語の場合であり「用茲某（茲の某を用いんか）」という句である。
- (20) 筆者は実際に牛の肩甲骨を用いて占卜工程の復元を行ったが、亀裂が生じる際には高い音が発生する。この音は、従来言われていた「卜（漢音ボク、上古音 [puk]）」よりも、「吉（漢音キツ、呉音キチ、上古音 [kɛt]）」に近かった（拙稿『殷代占卜工程の復元』『立命館文学』五九四、二〇〇六年）。このことから、「吉」に卜兆の発現の度合いを示す意味があったことが推測できる。

- (21) 中国社会科学院考古研究所『小屯南地甲骨』中華書局、一九八〇年。
- (22) この甲骨片は第二辞の上部が欠損しており、その部分に第二辞の験辞が記されている可能性もある。
- (23) 左列も同様の対貞であり、内容は「壬、啓。大吉。用」「不啓。吉」。
- (24) 姚孝遂主編『殷墟甲骨刻辞彙編集』（中華書局、一九八八年）は、合集二八五四六について「丁至庚、不遭小雨。大吉」「丁至庚、其遭小雨。吉。茲用。小雨」としており、卜兆の強さと「茲用」が逆転するが、「茲用小雨」は「吉」字から離れて骨片の欠損部分に近い位置に記されているので、欠けた別辞の験辞であろう。
- (25) 正確な比率は不明。
- (26) 先秦文献中の月齢を表示する語に、『尚書』顧命・康誥に見える「哉生魄」がある。これは「既生霸」の「既」を「哉」に誤り、「霸」が「魄」に仮借されたものであり、例外的に西周代の用法の名残が見られる。
- (27) 祖先祭祀における「乎（呼）」の具体的な儀礼は不明。
- (28) 仮借かもしれないが、殷代の発音は確実には知られないため明らかにできない。
- (29) 「鬼」は地名にも用いられている例もある。
- (30) 李学勤・斎文心・艾蘭『英國所蔵甲骨文字』中華書局、一九八五年。
- (31) 第二・五期には「正月」の語も存在する。なお、どの時代において「ただし」の訓が発生したのかは特定できない。
- (32) 複文での解釈も一応可能であり、書き下せば、「今、王、望乘を従え下危を伐つは、有祐を受くればならんか」「今、王、望乘を従え下危を伐つは、其れ有祐を受けざればならんか」という訓読になる。
- (33) 『甲骨学一百年』二七九頁。
- (34) 媿は出産の意。嘉は男児出生の意（これは合集一四〇〇二「嘉ならず。惟れ女なり」から明らかである）。



酒 日 其
戊 至

甲 于
酒 翌
日

酒 害 大 茲
今 吉 用
夕

1 合集二七四五四 (④) 一部。左行 (繇辞・驗辞は右行)。



亡 災
田 亡 災
田 亡 災
田 亡 災
害 率 田
害 芥
害 盞
害 奥 田 亡 災

吉

吉用

吉

之吉用
单

2 屯南二三八六 (⑥) 一部。右行。最下部左の「之吉用」「单」は別辞。



允 雀
其 雀 印
丙 辰 卜 丁 巳

3 合集一九七八〇 (⑭) 右行。



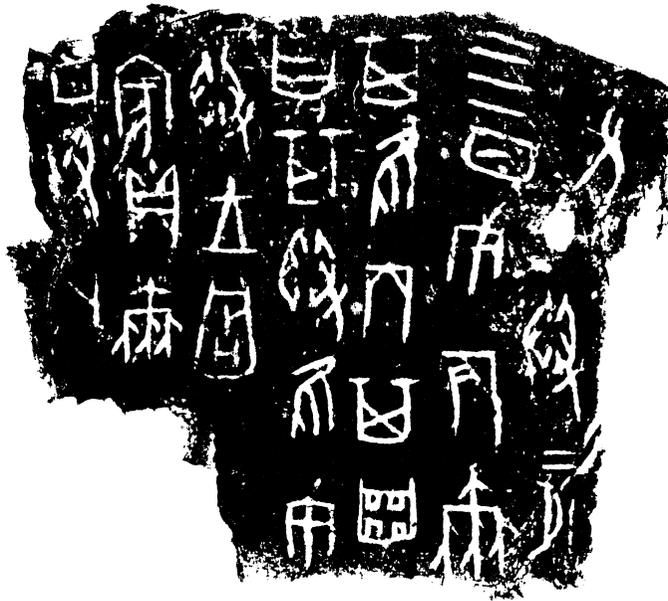
己 貞 子 人
 亥 翌 步 不
 卜 賓 庚 戈 橐
 十二月

6 英国五六四 (18) 一部。右行。



啓 見 雲
 翌 日 己
 其 雀 印
 卜 貞
 戊 戌

4 合集二〇九八八 (15) 一部。右行。[]は、やや不明瞭な文字。末尾の「癸」は別辞。



允 得 十二月
 四 日 庚 辰 束
 其 惟 丙 其 齒
 日 其 得 惟 庚
 得 王 固
 賓 貞 束
 丁 丑 卜

5 合集八八八四 (16) 右行。